

第3分科会

研究主題

運動する楽しさを味わいながら、
自分の心や体の成長を感じる子どもをめざして
－「体づくり運動」の学習過程に即した支援のあり方を通して－

なが おか
福岡市立長丘小学校

日程

9:30	10:05	10:50	11:05	11:50	13:00	13:10	14:30	15:00	15:10
受付	公開授業①	休憩	公開授業②	昼食	開会行事	研究発表	研究協議	指導助言	閉会行事

公開授業案内

公開授業①	第3学年	「多様な動きをつくる運動」	体育館
	第5学年	「体力を高める運動」	運動場
公開授業②	第4学年	「ソフトバレーボール」	体育館
	第6学年	「体力を高める運動」	運動場

学校所在地図



交通機関

□シャトルバス(有料・事前申込)運行
博多駅(筑紫口)→会場

○最寄駅

「西鉄平尾(西鉄)」下車 徒歩31分(タクシー15分)

○経路

博多 発 8:07 8:13 8:16 8:19 8:22 8:28 8:31
↓福岡市営地下鉄空港線
天神 着 8:12 8:18 8:21 8:24 8:27 8:33 8:36
(乗換)
西鉄福岡 発 8:22 8:32 8:42
↓西鉄天神大牟田線
西鉄平尾 着 8:25 8:35 8:45

学 校 概 要

学 校 名	福岡市立長丘小学校		
校 長 名	岸 本 洋		
学 級 数	26学級	児 童 数	800名
所 在 地	〒815-0075 福岡市南区長丘2丁目22番42号		
連 絡 先	TEL 092-511-1350 FAX 092-511-1413		



【学校紹介】

本校は鴻巣山の南斜面に位置し、校舎の窓からは近代的なマンションと緑の油山、そしてその後方にかすんで見える脊振山が見事に調和したすばらしい景色を望むことができる学舎である。そんな校区で生活している子どもたちは比較的家庭環境に恵まれ、落ち着いた子どもたちが多い。本校卒業生に元プロ野球選手

新庄 剛志氏があり、テレビで何度か放映されたことがある学校である

【研究の経緯】

本校は『生涯にわたってスポーツに親しむ体育科学習のあり方を求めて』の研究主題のもと、平成13年度、平成17年度に福岡市指定研究発表会を開催してきた。

そして、これまでの体育科研究の歩みをふりかえり、学習指導要領の改訂時期ともあわせながら、平成21年度から『運動する楽しさを味わったり、健康の大切さを考えたりしながら、自分の心や体の成長を感じる子どもをめざして』を研究主題に設定し、平成23年6月頃に福岡市指定研究発表会を開催する予定である。

【研究の概要】

本校では新学習指導要領完全実施を前に、低・中学年で新規導入される『体づくり運動』を中心に以下のような研究を進めてきた。

- ① 『体づくり運動』をどうとらえるのか。
- ② 子どもの自発性を大切にした体育の授業の創造
- ③ 「つかむ」「きづく」「ふかめる」「ふりかえる」の学習過程に即した支援のあり方



研究主題

運動の楽しさを味わいながら、自分の心や体の成長を感じる子どもをめざして

－「体づくり運動」の学習過程に即した支援のあり方を通して－

福岡市立長丘小学校

1 主題設定の理由

(1) 大会主題とのかかわりから

本校のめざす「自分の心や体の成長を感じる」子どもは、本大会でいう体育的学力の確かな定着を図ることと相通ずるものであると考える。また、運動の楽しさを味わわせることについても共に特性や魅力をそれぞれの学びの過程を通して身につけさせることができると考える。

(2) 『新しいふくおかの教育計画』（福岡市教育委員会）から

『新しいふくおかの教育計画』の中に、子どもたちの体力の低下は、体力の低下そのものに対する危惧とともに、学習意欲や難しいことに取り組む意欲、新しいことにチャレンジする意欲の低下にもつながるとし、より一層の健やかな体を育む取り組みの推進が強調されている。また、重点施策の一つとして、「遊びをとおした多様な動きの経験」と「体を動かす心地よさの体験」があり、まさに本校が研究を進めている内容と一致すると考えている。

(3) 子どもたちの実態から

現在、運動する子どもとそうでない子どもの二極化や体力・運動能力の低下は深刻化している。また、運動への意欲・関心や各種の運動の楽しさや喜び、その基礎となる技能や知識等、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の育成が十分に図られていないことや運動や遊びを通して培われる社会性や耐性等の低下も指摘されている。

これらの要因として、都市化や情報化とともに、地域コミュニティの崩壊、治安関係の不安からくる子どもの遊びの環境（時間・空間・人間）や遊びの内容の変化等が考えられる。

本校の子どもたちは明るく活動的で素直な子どもたちが多い。また、生活アンケートの結果から朝食の欠食はほとんどいないことやテレビの視聴時間・睡眠時間等の結果から基本的な生活習慣は定着し、学校生活全般にわたって意欲的に取り組むことができる子どもが多い。

昼休みも校庭で元気に遊び、800名と多い児童数だが、けがは少なく、安全に対する意識も比較的高いように思われる。

また、地域的にもスポーツは盛んな地域で、各種スポーツクラブに所属している子どもたちが多い。一方、教育にも熱心な地域であるため、学習塾や習い事のかけもちが多い。そのため、放課後友だちと遊ぶ時間が少ないので、少人数で遊んだり、おしゃべりしたり、ゲームを楽しんだりしているようである。

スポーツテストの結果からも垣間見えるが、本校の課題としては、スポーツクラブに所属していない子どもは戸外で遊ぶ機会や友だちが少ないため、全国的な課題と同様、運動の二極化傾向が見られる。また、スポーツクラブに所属している子どもでも同じ運動を繰り返しているために、多様な動きが十分に身につけていない状況である。

(4) 学校教育の重点から

以上のような子どもたちを取り巻く社会の動向や子どもの実態等をふまえ、学校教育目標を

『夢や目標の実現のための生涯学習生活をめざして、人情あふれる鴻ノ巣地域を学びの場として、豊かな心とたくましく生きる力を育む教育課程を創造し、平和な国家及び社会の形成者としての望ましい資質を持った子どもの育成をめざす。』と設定している。その具現化の一つとして、家庭や地域の教育力の向上や子どもたちの放課後の時間確保などを目的として、昨年度から午前中に5校時を組み込み、6校時後の下校時刻を15時30分という取り組みを試行している。

また、目標達成に向けての重点項目のⅠに「体育科教育を核に、自らの健康や身体について考える教育の充実」を掲げ、「体づくり運動」を中心とした体育科教育の研究とともに、保健・食育との関連を図りながら、運動の楽しさと健康の大切さを学び、自己の心身の成長を感じる子どもの育成をめざしていく。

2 主題の意味

(1) 「運動する楽しさを味わう」とは

運動の特性や魅力にふれ、めあてをもち、解決に向けて友だちとかかわったり、工夫・発見したりして、解決していく学びを心と体で味わい、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てることである。

(2) 「心や体の成長を感じる」とは

体づくり運動の学習を通して、自分自身の運動への関わり方や考え方を、よりよい方向につなげていこうとすることである。これは、本大会の体育的学力を身につけ、「わかる」「できる」「かかわる」「活用する」喜びを味わわせることと同じ方向に進んでいると考える。

3 研究の目標

体づくり運動の学習において、学習過程に即した支援を中心に、運動の楽しさを味わいながら、自分の心や体の成長を感じる子どもを育てるための具体的な支援のあり方を究明していく。

4 研究の仮説

体づくり運動の学習において、以下のような支援の工夫をすれば、運動の楽しさを味わいながら、自分の心や体の成長を感じる子どもが育つであろう。

- ① 運動の取り上げ方（着眼点Ⅰ）
- ② 用具や場の選定（着眼点Ⅱ）
- ③ 学習過程に即した具体的な支援のあり方（着眼点Ⅲ）

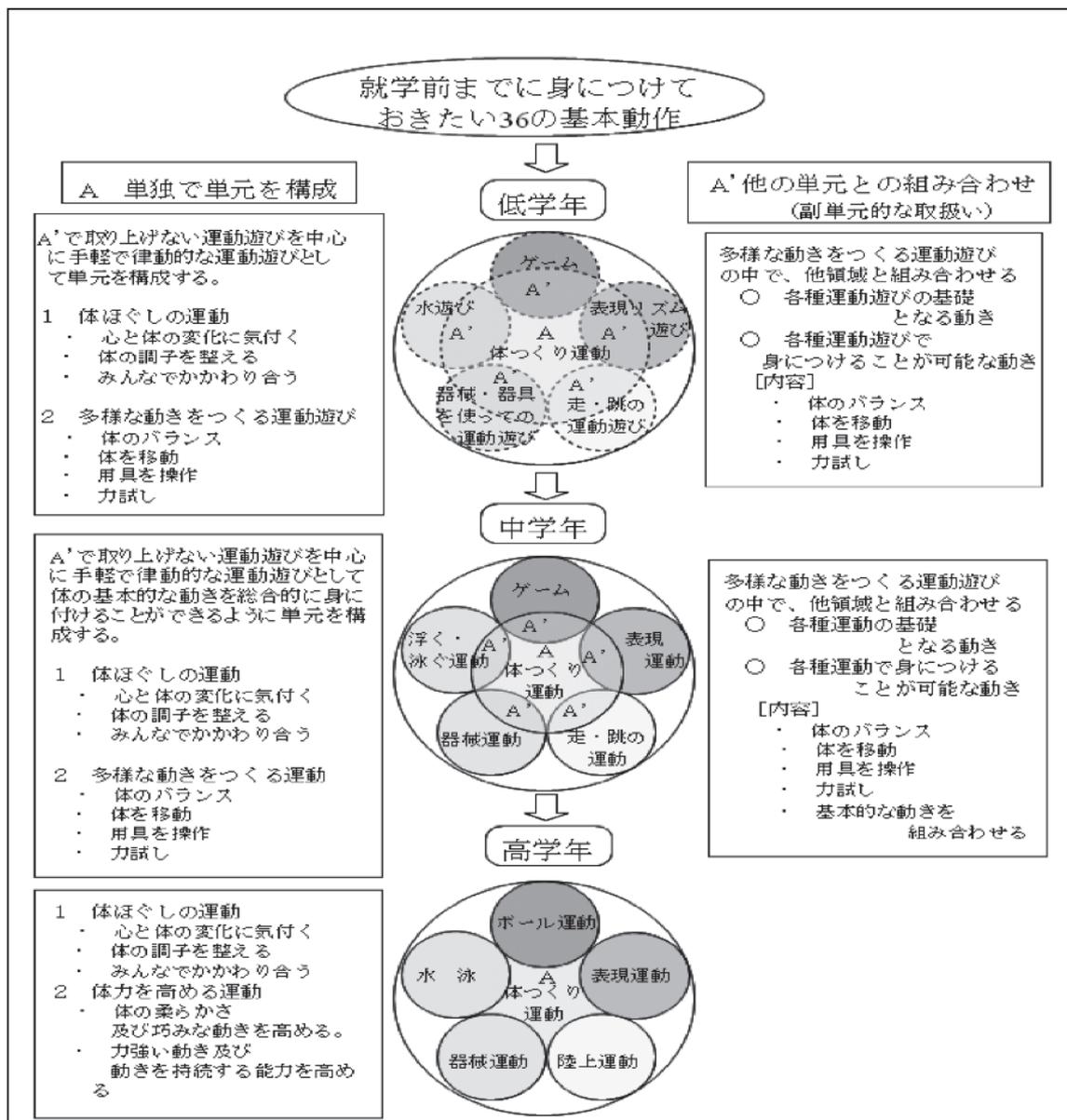
5 研究の構想

(1) 体づくり運動のとらえ方

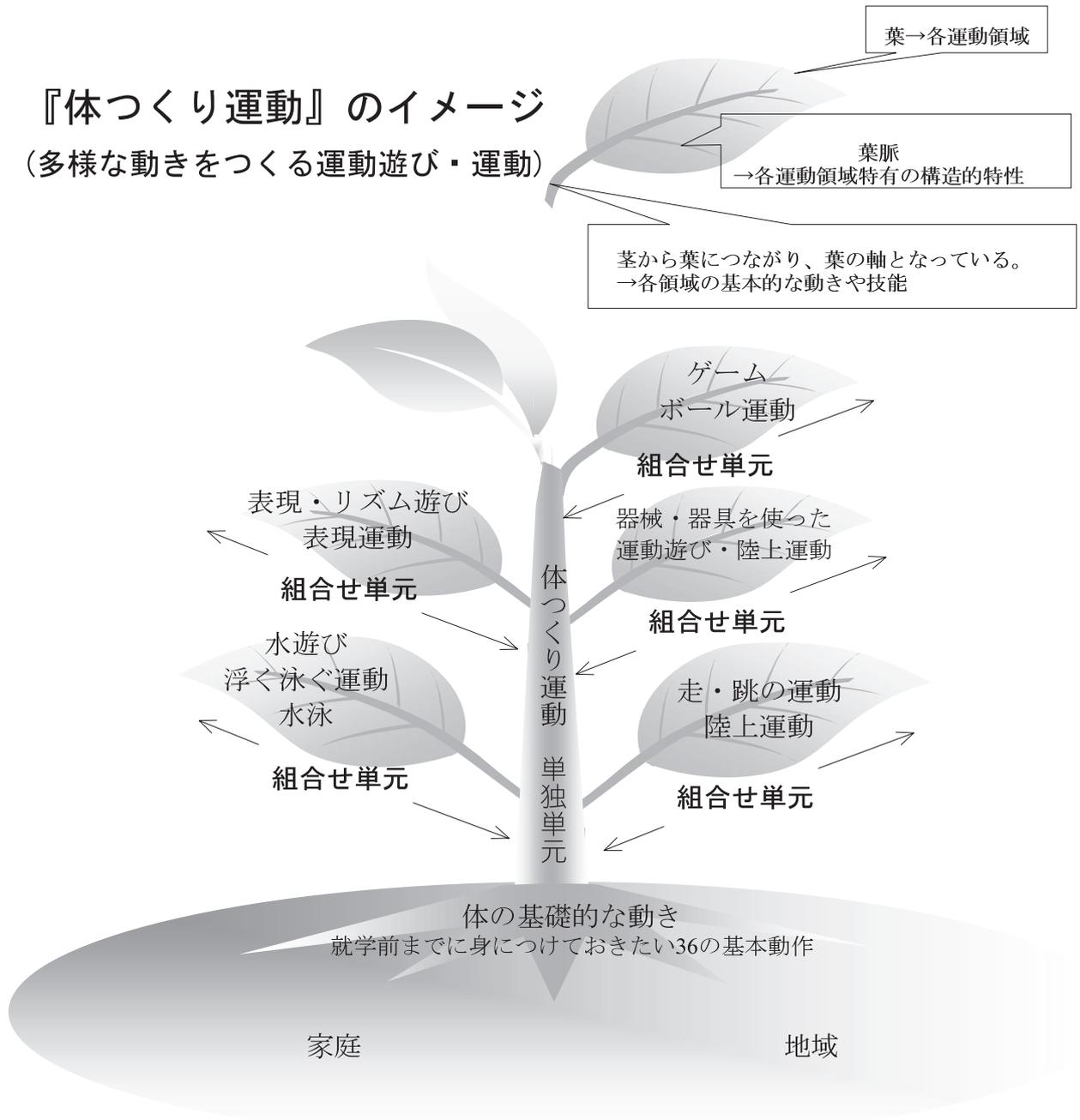
新学習指導要領解説体育編に「低・中学年においては、発達の段階を踏まえると、体力を高めることを学習の直接の目的にすることは難しいが、将来の体力向上につなげていくためには、この時期に様々な体の基本的な動きを培っていくことが重要である。そのため、体づくり運動では、他の領域において扱われにくい様々な体の基本的な動きを培う運動として低学年では、多様な動きをつくる運動遊び、中学年では、多様な動きをつくる運動と示すこととした。」と記してある。

このことは、体づくり運動以外の領域でも様々な体の基本的な動きを培うことができると考えられ、体づくり運動に関して、次のようにとらえた。

- ①体の基本的な動きづくりを「体づくり運動」ととらえる。
- ②他の領域における基本的な動きと組み合わせることができる。
- ③各領域または、領域間の特性の理解が深まることにつながる。
- ④高学年では、領域独自の技能を学ばせる時期であるので、単独単元として扱う。



『体づくり運動』のイメージ (多様な動きをつくる運動遊び・運動)



(2) 研究の内容

仮説 ① 「運動の取り上げ方」について（着眼点Ⅰ）

実際の授業における「体づくり運動」の年間の時数は、子どもの体力低下の実態が深刻な状況になっていることなどを考慮して、10～15時間程度配当すれば、効果が現れると思われる。

よって本校では、全学年が年間15、16時間程度「体づくり運動」に取り組むこととしている。その時間配分は、発達の段階や系統性を踏まえたうえで、1学期と2学期に6時間程度に分けて配列している。体ほぐしの運動は、交流のねらいを重視して、年度初めの学級開きなどの時期に、全学年3時間位置づけている。

多様な動きをつくる運動（遊び）は、様々な運動（遊び）を経験させると共に、発達の段階に応じて、重点とする動きを設定したり、動きを選ばせて身につけたりさせると効果的であると考え

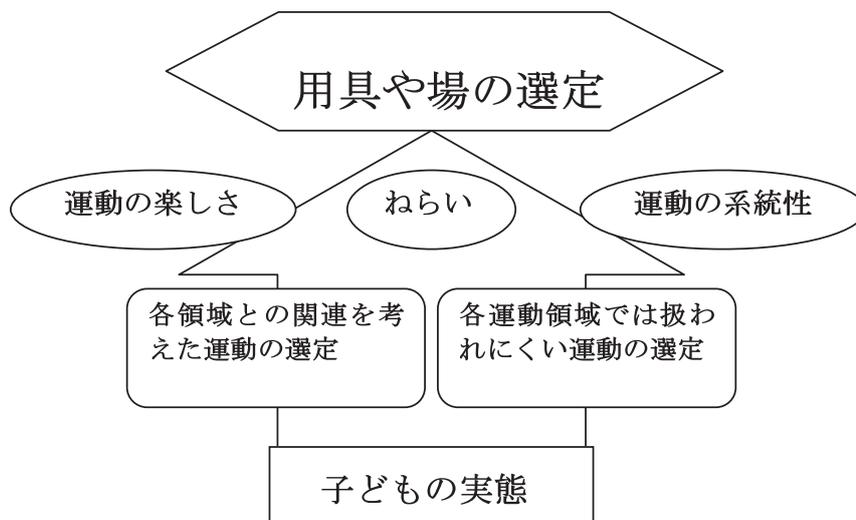
る。体力を高める運動は、運動に取り組みながら、その運動を通して身につけるべき動きに気づかせるとともに、自己の体力を高めるために運動を工夫させることが効果的であると考え

【本校のカリキュラムにおける体づくり運動の配当表】

	1・2年	3・4年	5・6年
年度初	体ほぐし運動 ③		
1学期	多様な動きをつくる運動遊び⑥	多様な動きをつくる運動⑥	体力を高める運動⑥
2学期	多様な動きをつくる運動遊び⑥	多様な動きをつくる運動⑥	体力を高める運動⑥

仮説 ② 「用具や場の選定」について（着眼点Ⅱ）

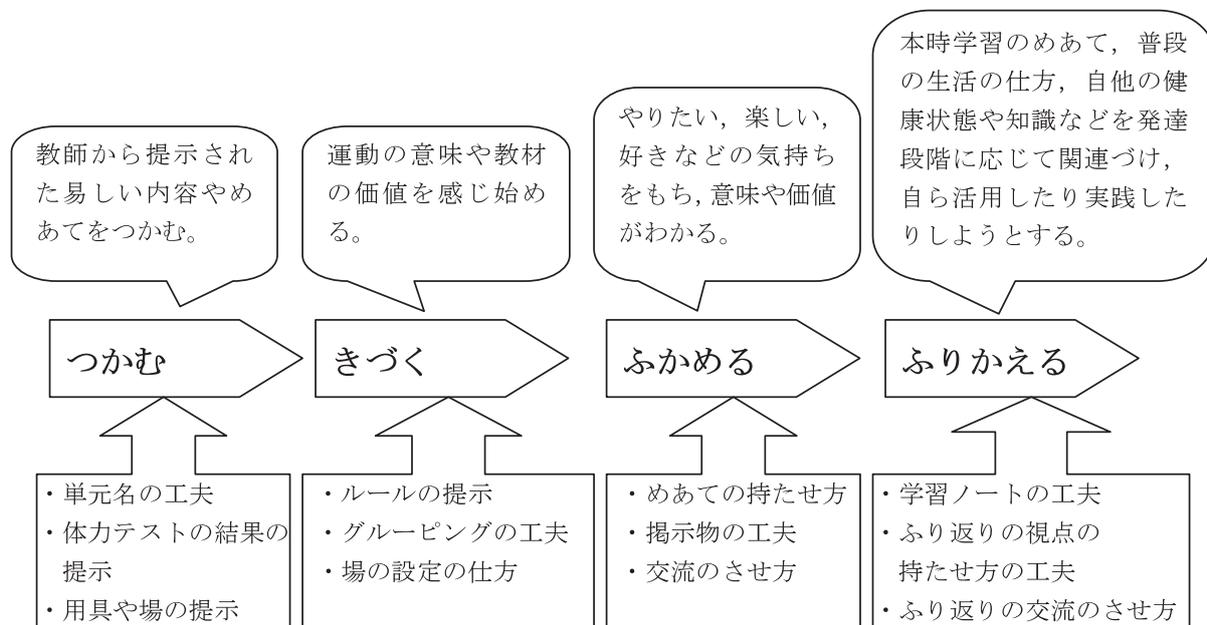
子どもの実態をもとに、運動領域では扱われにくい運動や各領域独自の基本的な動き・技能との関連を考えながら運動を取り上げる。そして、その運動の楽しさ・ねらい・系統性を吟味した上で、子どもたちに「どんな用具や場を」「いつ」「どのように」出会わせるか検討し選定することが有効であると考え



仮説 ③ 「学習過程に即した具体的な支援」について

まず、体育的学力に関する内容を踏まえ、具体的なめざす子どもを設定する。そして、実際の子どもたちの学習活動の姿と照らし合わせながら、支援のあり方を分析し、次時の具体的な支援に活かすことができる。

【学習過程に即した具体的な支援例】



【めざす子どもの姿】

- 技能（動き）の獲得や定着（高まり）に喜びを感じる子ども
- 自分（チーム）にあっためあてを持ち、その解決に喜びを感じる子ども
- 友だちと協力することに喜びを感じる子ども
- めあて解決に向けて、工夫・発見することに喜びを感じる子ども

6 実践事例

【実践例 1 第1学年「はっけん！はつめい！うごきっこあそび」（多様な動きをつくる運動遊び）】

1 学習のねらいとみちすじ

学習のねらい

用具をつかっていろいろな動きを経験し、その動きで楽しく遊べるようにする。

めあて1

みんなで動きをたくさん見つけて遊ぼう。

めあて2

みんなで見つけた動きをつかって楽しく遊ぼう。

めあて1では、たくさんの動きを経験させるために、用具（Gボールとフラフープ）を使った動きを経験させながら財産化し、めあて2で活用していけるようにした。そして、めあて2では、めあて1で財産化しまとめた動きの中から、子どもたちが、自分がやりたい動きを選んだり、つくりかえたりして楽しく遊べるようにした。

2 支援の工夫として

○用具の取り上げ方

子どもたちの興味・関心をかき立て、身に付けさせたい動きを引き出せるような運動遊びに必要な用具として、今回は、フラフープとGボールを取り上げた。

- ・フラフープ・・・身近で手軽に操作でき、いろいろな回し方をしたり、転がしたりできる。
- ・Gボール・・・使う経験は少ない用具であるが、軟らかく、操作がしやすい。多様な姿勢での運動課題を引き出すことができ、乗った感覚や弾ませることが楽しい。

○場づくりの工夫

めあて2で、同じ用具を使って遊ぶ子どもや同じ遊び方をする子ども同士が、できるだけ近くで活動ができ、自然に子どもたち同士の関わりうまれることをねらい、フラフープの場、Gボールの場、組み合わせの場を設定した。

友だちに手伝ってもらって、Gボールで
バランスを取って遊んでいる子ども



Gボールに後ろ向きで乗って
バランスを取っている子ども



グループで、3つ並べた
Gボールに腹ばいになって乗っている子ども



【実践例 2 第3学年「多様な動きをつくる運動」】

1 学習のねらいとみちすじ

学習のねらい

- ・体を動かす楽しさや心地よさを味わうとともに、その運動の基本的な動き及び組合わせた動きを総合的に身に付けさせる。

めあて1

グループで協力しながら、いろいろな動きを楽しもう。

めあて2

グループで工夫しながら、動きを組合わせて楽しもう。

めあて1では、平均台・バランスディスク・Gボール・縄跳び・フラフープの5つのコーナーを事前に決めておいたグループ毎に、やってみたい場にどんどん移動して用具の特性に触れて楽しませた。1グループの人数は、友だち同士で教えあったり、助け合ったりすることをねらい、3～4人に設定した。めあて2では、課題別グループとし、子どもたち一人一人のが興味のある活動を自ら進んで取り組むことや運動の組合わせ方や工夫についての子どもたち同士の交流が自然にでてくることをねらって計画した。

2 支援の工夫として

○ 用具の取り上げ方

2年生で経験したGボール、3年生の1学期に経験した平均台、その他にバランスディスクや大縄・短縄、フラフープを取り上げた。また、動きの組み合わせに楽しく活用できそうな用具として、ソフトバレーボール、新聞紙、お手玉、タオル、ケンステップ、体操棒を、補助的な用具として準備しておき、自由に活用させた。

- ・Gボール、バランスディスク・・・普段経験できないような多様な動きを引き出すのに適していて、バランスや用具操作、力試しの運動をねらった。
- ・平均台、大縄、短縄、フラフープ・・・既習経験もあり、身近な用具として活用しやすい。

○ 場づくりの工夫

組合わせを「○○の場で～しながら～する。」というキーワードで意識づけし、4つの組合わせランドとして、体育館の4隅（コーナー）に活動の中心となる場を設定した。そして、組合わせの補助的な用具は、中央に配置した。これらは、子どもたちが用具を取りに行った際、他のコーナーの動きをみることができ、自然に交流ができると考えた。

動きの組合わせを楽しむ子どもの様相例

平均台の上でバランスを取りながら歩き、フラフープを回している子ども。



Gボールの上でバランスを取りながら2本の棒の上のボールを落とさないようにしている子ども。



バランスディスクの上でぞうきんを使って、落ちないように綱引きをしている子ども。



【実践例 3 第4学年「跳び箱運動」(組合わせ単元)】

1 学習のねらいとみちすじ

学習のねらい

・とび箱運動の構造的特性に関連する運動として、多様な動きをつくる運動の中の「体の移動」と「体のバランス」を楽しませる。

体づくりの運動を、多様な動きをつくる運動の中の「体の移動」と「体のバランス」に絞って提示した。これらの運動は、とび箱運動の構造的特性に関連する運動としてとらえ、とび箱運動の助走・踏み切り・着手・空中姿勢・着地の技術に関連する両足踏み切りや腕支持感覚、空中での姿勢づくり、バランス感覚を、運動を楽しませながら養うことをねらった。

2 支援の工夫として

○ 学習過程に即した支援

「つかむ・きづく・ふかめる・ふりかえる」の学習過程に即した支援として、第3時までに、毎時2つずつの運動を教師側から紹介し、体験させた(つかむ)。第4時から、体験した運動の中から楽しかった運動を行い、この中で、運動の仕方や楽しみ方がわかる(きづく・ふかめる)ような声かけや友だちとの関わらせ方を支援した。

7 研究の成果と課題

(1) 成果

- 様々な体の基本的な動きを身につけさせるために、環境や運動を、ねらいに照らして選定したことは、有効であった。特に、Gボールは、乗る、弾ませる等の動きを引き出しやすく、動きの多様性や柔軟性、運動量の確保等の面で有効であった。
- 多様な動きをつくる運動の中から、跳び箱運動の構造的特性に関連する「体の移動」と「体のバランス」に絞って運動を取り上げたことは、子どもたちの跳び箱運動に必要な基本的な技能を養うことにつながっていた。

(2) 課題

- 「体づくり運動」を、どのようにとらえるかや独立単元・組合わせ単元における運動の取りあげ方をさらに研究していく必要がある。また、組合わせ単元において、学習過程に即した評価の具体的なあり方も、主の単元との関連を考えて研究していかなければならない。
- 「つかむ」「きづく」「ふかめる」「ふりかえる」の学習過程に即した具体的な支援のあり方と子どもたちの実態や学習の内容・ねらいに応じた重点の置き方をしっかり研究していかなければならない。
- 教師がねらう用具が持つ本来の使い方と子どもたちのニーズにずれが生じることがあるので、ねらいをさらに明確にし、それに合った動きを引き出せるような運動の選定をしっかりとていかななくてはならない。